



あたらしい 農業技術

No.507

中山間地域における
茶園景観の活用と保全

平成 20 年度

要 旨

1 技術、情報の内容及び特徴

- (1) 大井川中流域の茶園景観の特徴として、河川沿岸（主要道沿い）の景観に占める茶園占有率が比較的高いこと、河川沿岸には地形に沿った緩傾斜茶園が多く連続性があること等があげられます。
- (2) 地域内外の住民を対象とした評価実験の結果から、山間部の茶園景観や丘陵から見下ろせる景観の評価が高い傾向があり、地域住民では「開放感がある」「整然とした」、地域外住民では「静かな」「自然が豊かな」という印象を強く与える景観の人気が高くなりました。
- (3) 茶園景観の活用策として、川根茶のイメージアップ（自然豊かな茶園景観を商品パッケージ等へ利用）、川根茶園八景の創設、グリーンティーツーリズムへの活用、フィルムコミッションへの茶園景観の提供等が考えられます。
- (4) 茶園景観の保全策（耕作放棄の抑止策）として、茶園管理の法人化、茶工場を核とした共同摘採等により地域内で労働力を確保する方法や、一社一村しずおか運動、茶園オーナー制を活用することにより地域外から労働力を確保する方法が考えられます。

2 技術、情報の適用効果

- (1) 優良茶園景観を川根茶の販売戦略や観光に有効活用することにより、茶業経営の向上、茶産地のイメージアップが期待でき、地域振興が図られます。
- (2) 耕作放棄茶園の増加は地域の景観を著しく損ねるとともに生産体質の弱体化にもつながります。茶園の景観としての価値を評価し耕作放棄の抑止に役立てることにより、中山間地茶業の振興と存続が図られます。

3 適用範囲

静岡県内の中山間茶産地。

4 普及上の留意点

大井川中流域（川根地域）を対象とした調査及び実験の結果であり、他地域では本結果や手法を参考として各所の状況に応じて振興策を検討してください。

目 次

はじめに	1
1 大井川流域（川根地域）の茶園景観の特徴	1
（1）主要道沿いの車窓景観における茶園占有率	1
（2）大井川鉄道の車窓景観における茶園の出現時間	2
（3）茶園景観の特徴と成立要件	3
2 茶園景観の評価	5
（1）茶園景観の選定	5
（2）住民に対する評価実験	5
3 優良茶園景観の活用策	8
（1）川根茶のイメージアップ	8
（2）川根茶園八景の創設	8
（3）グリーンティーツーリズムへの活用	8
（4）フィルムコミッションへの茶園景観の提供	9
4 茶園景観の保全策	9
（1）地域内で労働力を確保し茶園管理を行う事例	9
（2）地域外から労働力を確保し茶園管理を行う事例	10
おわりに	11

はじめに

静岡県内の中山間地域は古くから良質茶の産地と知られ、県内茶業において重要な役割を担ってきました。しかし、不利な生産条件に加え、近年の茶価の低迷やリーフ茶需要の減少から、小規模で零細な個々の茶業経営は年々厳しさを増しており、茶園面積は漸減し耕作放棄茶園も散見されるようになっていきます。

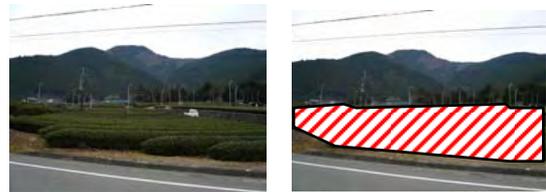
中山間地域における茶生産は、機械化や規模拡大による低コスト化には限界があり、付加価値を高める必要があります。地域の立地条件を活かした特徴的な茶づくりはもとより、周辺の豊かな自然環境やクリーンな地域のイメージを製品に付加するような販売戦略が重要であると考えられます。国土保全や保健休養といった農業・農村の持つ多面的機能が評価され、グリーーツーリズムが盛んに行われている中で、茶の消費者である都市住民が憩いの場として中山間地域を訪れた時、茶園を含む地域景観は産地イメージの向上に重要な役割を果たすと考えられます。

そこで、本研究では、大井川中流域（川根地域）をモデルとして、茶園景観を観光客の目線からとらえ、その特徴と景観に対する住民意識を明らかにするとともに、得られた結果を茶を主体とした地域振興に役立てることを目的として、茶園景観の活用策と保全策を提案しました。

1 大井川流域（川根地域）の茶園景観の特徴と成立要件

（1）主要道沿いの車窓景観における茶園占有率

川根町身成（現島田市身成）を始点として、河川沿いの主要地方道（県道 64 号線、国道 362 号線他）を終点寸又峽（川根本町千頭）まで北上し、1km ごとに車窓からデジタルカメラ（広角、720 万画素）で 3 方向（前、左、右）を撮影しました。次に、印刷した写真の全体面積と茶園部分の面積を測定し、地点（1km）ごとの画像中の茶園占有率を算出しました（図 1）。



茶園占有率＝茶園部分の面積／写真全体面積
上記例 50.9cm²/147cm²=34.6%

図 1 茶園占有率の算出方法

なお、比較対象として県内の代表的な中山間茶産地である安倍川流域（静岡市）及び天竜川流域（浜松市）についても同様の調査を行いました。

調査結果を図 2 に示しました。始点から終点までに合計 46 地点の車窓景観が得られました。この区間の車窓景観中の茶園占有率は平均 5% で、占有率 10% 以上が 46 地点中 9 地点ありました。特に占有率が高い地点では、山すその低地部分や河岸段丘の斜面において比較的緩傾斜の茶園が連続的に見られました。37km 地点以降、寸又峽に至るまでは、周囲は山林で集落はなく茶園は見られませんでした。一方、安倍川流域の占有率は平均 3% で、同 10% 以上が 40 地点中 3 地点ありました。天竜川流域においては、占有率は平均 1% で、同 10% 以上が 38 地点中 2 地点でした。以上のことから、他の茶産地と比較して、大井川流域（川根地域）における茶園の出現頻度は高いことが明らかになりました。

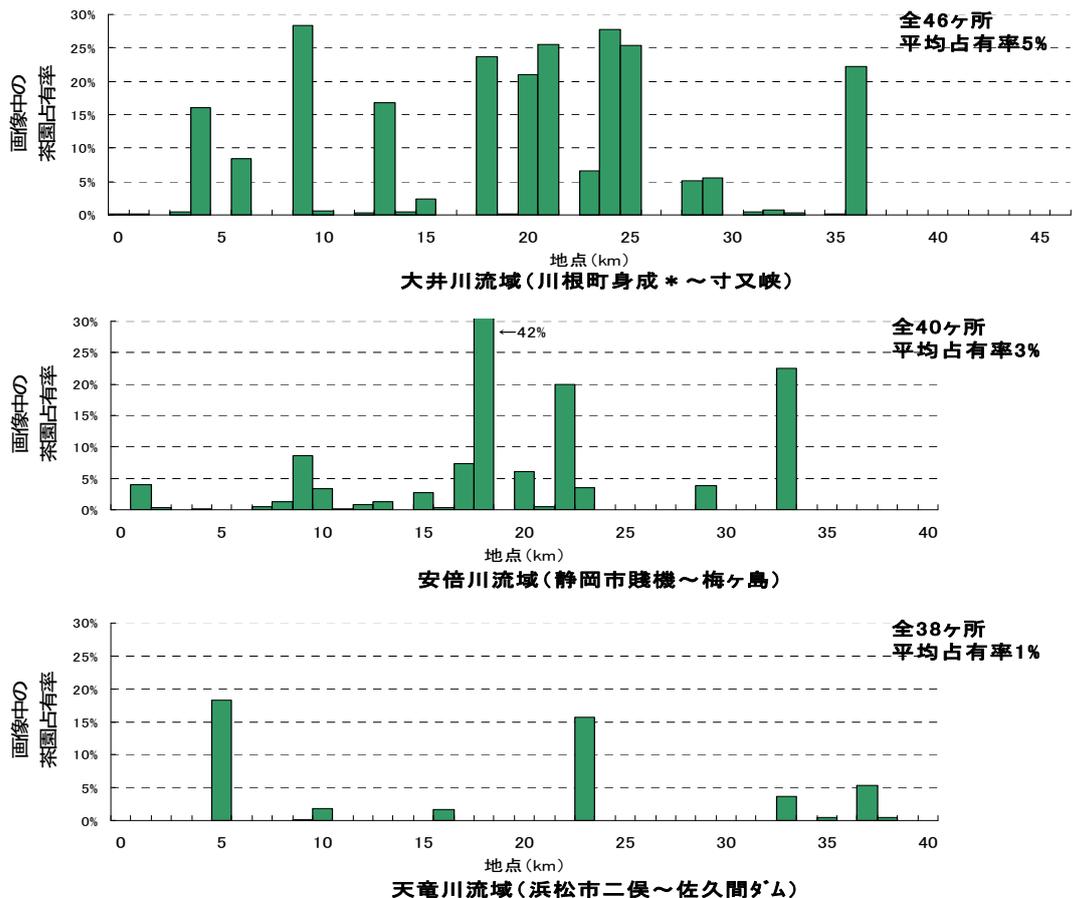


図2 三河川流域の車窓景観における茶園占有率 *現島田市身成

(2) 大井川鉄道の車窓景観における茶園出現時間

大井川鉄道大和田駅から千頭駅の区間の車窓景観（進行方向左）をデジタルビデオカメラで連続撮影し、走行時間中に茶園が映っている時間を算出しました。

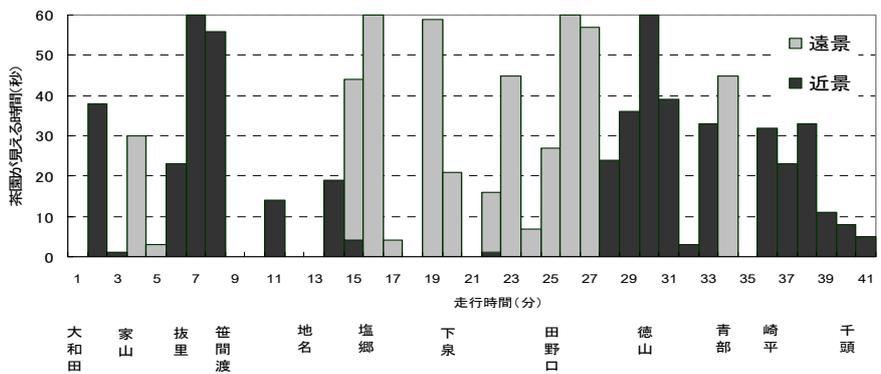


図3 大井川鉄道の車窓景観中の茶園出現頻度

大井川鉄道（大和田～千頭間）の走行時間

は約41分で、そのうち車窓から茶園が見える時間は約17分ありました。逆方向（千頭～大和田間）では約6分でした。地区別に見ると、抜里～笹間渡、徳山駅周辺、崎平～千頭で近景が、塩郷～下泉、田野口～徳山で遠景の茶園景観が多く見られました（図3）。抜里地区では、鉄道の近傍に区画整理事業による平坦で整形な茶園が広がり、徳山駅から青部駅にかけては、市街地に点在する小区画な茶園が車窓に次々に映ります。塩郷から田野口付近にかけては、河川対岸の山すそや河岸段丘の斜面に住宅と混在する緩傾斜茶園が連続的に見えます。

(3) 茶園景観の特徴と成立要件

(1) 及び (2) の調査結果や達観から得られた川根地域の茶園景観の特徴を表 1 に示しました。

表 1 大井川流域（川根地域）の茶園景観の特徴

河川沿岸（主要道沿い）の景観に占める茶園占有率は比較的高い。
②河川沿岸には地形に沿った緩傾斜茶園が多く石段積み茶園は少ない。
③対岸の茶園も遠景に含まれ連続性がある。
④一部で耕作放棄茶園が散見され、市街地を中心に住宅と茶園が混在している。

次に、大井川、安倍川、天竜川の各流域の茶産地における茶業データ及び地形条件、産地の分布状況を比較することにより、大井川流域（川根地域）の茶園景観の成立要件を考察しました。

地形断面（図 4）から大井川流域の河川両岸は平坦な低地や比較的緩やかな傾斜地が多く、地形に沿った茶園造成が行われてきました。これが、緩傾斜茶園が多く見られる大きな要因と考えられます。これに対し、安倍川や天竜川流域では、河川の両側は急峻な地形となっています。

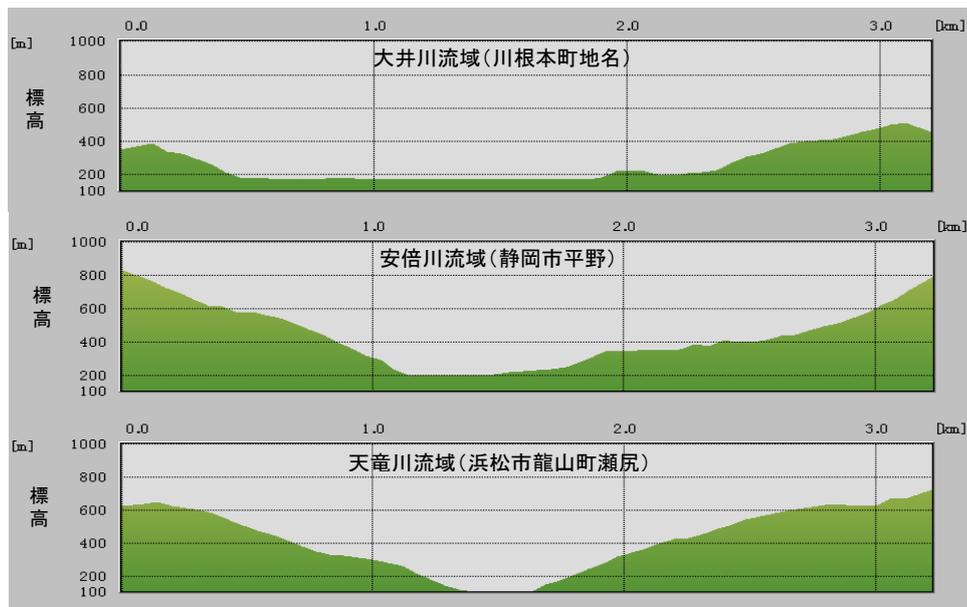


図 4 三河川流域の地形断面図（景観中の茶園占有率が高い地点）

また、大井川流域において、茶園景観の出現頻度が高く連続性があるのは、産地の立地状況と河川の蛇行が大きく関係していると考えられます。集落単位の茶園のまとまりを 1 つの産地としてプロットしたものを図 5 に示しました。

安倍川や天竜川流域では、支流沿いに横方向への広がりが大きく産地間の距離も長いのにに対し、大井川流域では沿岸の 18 の産地が狭い範囲に連なるように分布しています。これらの産地の場所はこの流域に見られる多くの河岸段丘とほぼ一致しています。この河岸段丘は、何万年という周期で隆起浸蝕を繰り返しながら幾層にも分かれて河床が下がり形成されたとされています¹⁾。茶の栽培は低位段丘上の集落を中心に上側の台地や傾斜地に広がり¹⁾、次第に産地としてまとまっていったと考えられます。

表 2 に示したとおり、大井川流域の調査ルートである川根町身成から寸又峡までの直線距離に対する河川長の比は 1.86 となりました。本流部(寸又川分岐点まで)に限れば 1.98 となり、安倍川の 1.27 と比較するとかなり大きく、蛇行の激しさを示しています。蛇行する河川の流れに挟まれた部分は河岸段丘が突き出すように連なるため、対岸から見ると、段丘ごとに分布する茶園景観が連続的に映っていくことになります。

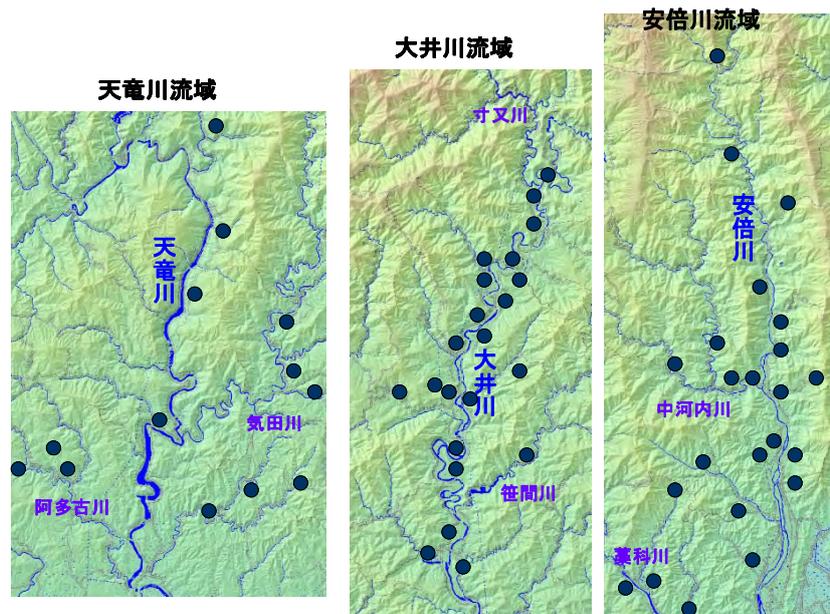


図 5 三河川流域における茶産地の分布

表 2 三河川流域の地形条件及び茶業データの比較

	大井川流域	安倍川流域	天竜川流域
調査ルート上の地形			
・河川長／直線距離	52.8km/28.4km=186% (本流部47.8km/24.1km=198%)	41.0km/32.4km=127%	43.1km/25.2km=171%
・標高(始点－終点)	130m－500m	60m－890m	40m－250m
茶業データ			
・対象地区	川根本町、川根町	旧静岡市の中山間地域	旧天竜市・龍山村・佐久間町・水窪町・春野町
・茶園面積(農林業センサス ²⁾)	785ha	965ha(推定)	355ha
・茶栽培農家戸数	1,381戸	1,673戸(推定)	882戸
・沿岸の主要茶産地数	18	9	3

川根地域の茶業の始まりは古く、17世紀以前から栽培や製造が行われていたとされています。江戸中期以降、次第に高級茶としての名声が高まり、明治中期から今日に至るまで各種の品評会で多数の入賞を収めてきました。自園自製の形態が多く家族労働を基本に労働集約的な手摘みによる上級茶生産が近年までの川根茶業の特徴です³⁾。生業である茶は日常生活と密着し、経営は小規模ながら屋敷に隣接して茶園が植えられ栽培されてきた結果、住宅と茶園が一体的になった景観が形成されたと考えられます。また、近年では、兼業化や後継者難により耕作放棄茶園が増加している地区も見られます。

以上、考察された茶園景観の成立要件を表 3 に示しました。

表 3 大井川流域(川根地域)の茶園景観の成立要件

- ①河川幅が比較的広く兩岸の地形があまり急峻でないこと。
- ②狭い範囲に比較的まとまった茶産地が連続的に立地していること、また河川の蛇行が激しいこと。
- ③古くから茶業への依存度が高く住宅と茶園が一体となっていること。

2 茶園景観の評価

(1) 茶園景観の選定

川根町（現島田市川根地区、以下略）及び川根本町内で撮影した茶園景観（400枚程度）を、地形や周辺の土地利用などの立地条件から数タイプに分類しました。そのうち優良な景観の視点場10ヶ所を選定し、統一条件下で再度撮影しました（図6）。視点場の選定に当たっては、手前（近景）に茶園が広がり背景（遠景）の山、河川、空、住宅などと調和がとれていることや、ある程度の開放感があり見渡せる視点であることに留意し、なるべく多くの地区から選ぶようにしました。撮影は、広角（焦点距離28mm）のデジタルカメラ（720万画素）を用い、原則として2007年4月下旬（一番茶生育期）の晴天時に行いました。10ヶ所のうち、No.1からNo.6は低地や丘陵地からの景観、No.7からNo.10は標高の高い山地からの景観です。



No. 1
低地，市街地



No. 2
丘陵，市街地・山林



No. 3
低地，市街地



No. 4
丘陵，市街地・山林



No. 5
低地，市街地・山林



No. 6
低地，市街地・山林



No. 7
山地，山林



No. 8
山地，山林



No. 9
山地，山林



No. 10
山地，山林

図6 評価用に選定した景観10ヶ所の写真及び立地状況（地形，周辺土地利用）

(2) 住民に対する評価実験

被験者は、地域住民として川根町及び川根本町の茶生産者60（男51，女9）名、地域外からの来訪者（地域外住民）として想定した静岡県消費生活モニター98（男10，女88）名としました。

写真をラミネート加工したものを被験者に提示し、写真ごとにSD(Semantic Differential)

表 4 茶園景観に対する住民間の意識差

評価尺度\景観 No.	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
静かな	* 0.35	0.15	** 0.57	0.20	** 0.61	** 0.37	-0.11	0.05	* 0.24	** 0.32
開放感がある	-0.10	-0.05	0.40	0.16	** 0.60	** 0.36	-0.22	0.23	0.22	** 0.42
ほっとする	0.38	0.22	** 0.50	0.15	** 0.74	** 0.39	-0.16	0.20	0.11	** 0.35
遊んでみたい	0.01	0.03	0.38	0.00	* 0.47	0.01	** -0.54	0.19	0.02	0.20
親しみやすい	* 0.45	0.14	* 0.46	0.28	** 0.58	0.20	-0.35	0.12	-0.14	0.30
整然とした	-0.34	-0.09	* 0.39	0.05	** 1.01	* 0.32	-0.23	** 0.60	0.25	0.40
調和した	-0.27	0.01	0.30	0.19	** 1.05	** 0.56	-0.28	* 0.51	* 0.27	** 0.57
自然が豊か	0.35	0.18	0.33	* 0.39	** 0.61	** 0.51	0.11	0.12	** 0.47	** 0.60

※表中の数値は、SD法により得られた平均点の差（地域外住民－地域住民）。－（負）の符号は地域住民のほうが評価が高いことを示す。

※表中のアスタリスクは、Mann-WhitneyのU検定によりデータ分布に有意差があったもの（**：0.01>、*：0.05>）。

$$y = a_1 x_1 + a_2 x_2 + \dots + b \quad \dots \text{式 1}$$

目的変数 y = 景観の選好度 (その景観を選んだ人の割合)
 偏回帰係数 a_1 重み 1
 説明変数 x_1 評価尺度 1 の設問に対する得点
 偏回帰係数 a_2 重み 2
 説明変数 x_2 評価尺度 2 の設問に対する得点
 定数項 b

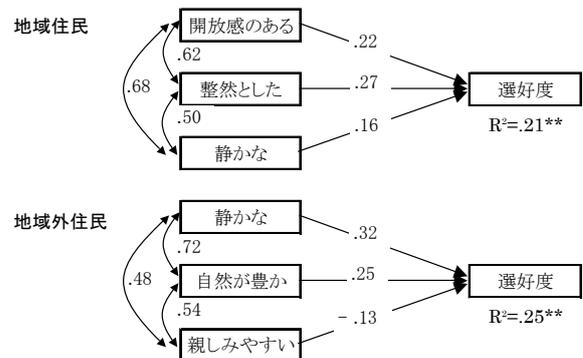
*重回帰分析とは、目的変数と説明変数の関係を調べ、関係式を作成しこれを用いて、予測式を作ったり、説明変数が目的変数に及ぼす影響度を明らかにする手法である。偏回帰係数が大きいほど目的変数への影響度が高くなる。

次に、各景観の選好度が、いくつかの評価尺度が影響を及ぼし合って成り立っているものと考え、目的変数を「各景観の選好度」、説明変数を「各評価尺度における得点」として重回帰分析*を行いました（式1）。

その結果、各景観の選好度に大きく影響を及ぼす評価尺度は、地域住民では「開放感」や「整然さ」、地域外住民では「静かさ」や「自然の豊かさ」でした（図9）。つまり、地域住民では「開放感がある」「整然とした」という印象を強く与える景観の評価が高くなり、地域外住民では「静かな」「自然が豊かな」という印象を強く与える景観の評価が高くなるということです。

ウ 好ましくない景観構成要素

好ましくない景観構成要素として、電線・電柱、住宅建造物、ガードレール、鉄塔などの人工物が選択されました。防霜ファンについては、地域外住民よりもむしろ地域住民のほうが好ましくないと考えられる割合が高く、地域外から訪れる人にとっては思ったよりも景観上気になっていないということが推察されました。（図10）



評価尺度と選好度を結ぶ矢印上の数値は偏回帰係数、評価尺度間を結ぶ矢印上の数値は評価尺度間の相関係数。R²は重相関係数（**：0.01>）、数値が大きいほど重回帰式の精度が高いことを意味する。

図 9 各景観の選好度を目的変数とする重回帰分析の結果

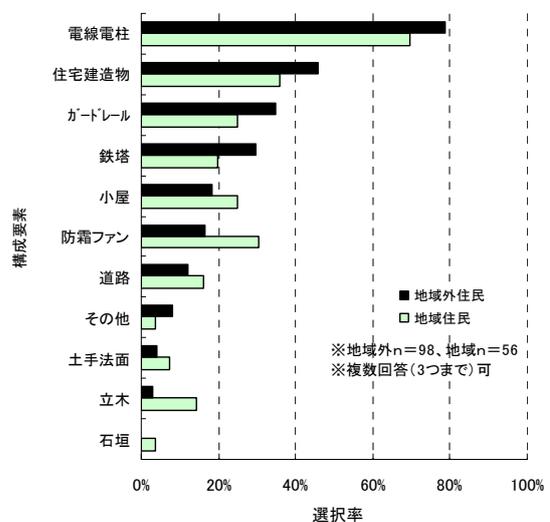


図 10 好ましくない景観構成要素

3 優良茶園景観の活用策

(1) 川根茶のイメージアップ（商品パッケージ等への利用）

川根茶は全国でも数少ないブランド力を持つ産地銘柄ですが、近年のリーフ茶需要は減少傾向にあり、川根茶のブランド力を一層強化し需要を回復するための戦略が必要です。

静岡県立大学岩崎准教授は、お茶のマーケティング戦略として、**what**（何を売るのか）ではなく **why**（なぜ買うのか）に注目し、「茶のあるライフスタイルを売る」ことや「緑茶のある地域を売る」ことを提唱しています⁶⁾。

これまでのように、茶を売ることが主眼に置き高級茶を中心とした茶そのもののPRのみを行うのではなく、清流大井川や自然環境に恵まれた山間地の良いイメージを商品に付加することは有効な販売戦略と考えられます。都市住民（＝消費者）が好みそうなイメージの茶園景観を選定し、茶商品のパッケージやパンフレット、HPなどに活用してはどうでしょうか。

(2) 川根茶園八景の創設（観光への利用、ビューポイントの整備）

昔の人々は何気ない風景を深く味わう手だてとして「八景式」を考えました⁷⁾。日本では安藤広重が描いた「近江八景」「金沢八景」などが有名です。川根地域には自然と調和した多くの優良茶園景観があります。そこで、多くの景観から選りすぐられた「川根茶園八景」を創設しビューポイントとして整備してはどうでしょうか。八景の場所の選定に際しては、観光・茶業関係者、景観研究者、都市住民（消費者）、地域振興リーダーなどがチームを編成し多面的に検討することが大切です。そのためには、現地に数回足を運び、写真では感じることのできない眺望や雰囲気を感じ、季節ごとの景観の良否、アクセスのしやすさ、観賞用施設（ベンチ、柵等）の設置の可否、お茶体験によるもてなしの可能性等についても考慮する必要があると思われます。

(3) グリーンティーツーリズムへの活用（景観とお茶体験を組み合わせた来訪者へのもてなし）

緑茶の振興と静岡らしい観光を提案するため茶産地やお茶の歴史、お茶のおいしさを訪ねる「グリーン・ティー・ツーリズム」が提唱されています⁸⁾。このグリーンティーツーリズムに景観観賞やお茶体験を組み入れ、全国や海外からの来訪者に、茶を五感で体験してもらってはどうでしょうか。

味覚と嗅覚で茶の香味を楽しみ、視覚で景観を楽しみ、聴覚で山あいの静けさや川のせせらぎ、鳥のさえずりを聴き、触覚で茶芽の手触りやすがすがしい空気を感じるとともに、来訪者が産地の人々のもてなしの気持ちを直接感じることができ、顔が見えることによる安心感を得られます。

また、農業・農村体験には保健休養（癒し）効果があることが報告されています⁹⁾。茶を素材とした体験には、お茶摘み、茶染め、茶菓子づくりや茶を使った料理、闘茶（茶歌舞伎）、写真コンテスト、地元生産者との交流などが考えられます。お茶摘みなどは生産時期や作業の繁忙期と重なることが予想されますが、品種や整枝技術の導入、標高差の利用、多様な茶種の生産等により摘採時期の延長を図るとともに、観光協会や日本茶インストラクターなどの支援も含めて組織的に行うことにより対応することが望まれます。

(4) フィルムコミッション*への茶園景観の提供

川根地域には、清流大井川、SL、渓谷など優れた映像素材が豊富にあり、近年では、TVドラマや映画の撮影も行われています。前述のとおり、乗用車や鉄道の車窓から連続的に見える茶園景観や山間部の優良茶園景観は希有な存在であり、これを映像化、画像化し、フィルムコミッションへ積極的に提供したいものです。ロケ地として採用され当地域の茶園景観がTVや映画を通じて全国に配信されれば、誘客効果とともに茶産地としてのイメージアップの効果も期待できます。

*フィルムコミッション：映画、テレビドラマ、CMなどのあらゆるジャンルのロケーション撮影を誘致し、実際のロケをスムーズに進めるためにさまざまなサービスを行う窓口機関で、民間、NPOなど県内に6団体がある。

4 茶園景観の保全策

耕作放棄された茶園は地域の景観を著しく損ねます。耕作放棄地が発生するのは、茶業の担い手の高齢化や後継者難に伴う労働力不足が大きな要因となっています。ここでは、事例調査から、地域内外から茶園管理に必要な労働力を確保する方法について検討しました。

(1) 地域内で労働力を確保し茶園管理を行う事例

担い手不足が進展する中で、地域内で労働力を確保し茶園管理を行っている事例として、農業生産法人である(有)G・Fは、茶園管理部門の法人化により作業の合理化とコスト削減を行っています。(農)H・I園では共同摘採により相互の労働力の補完を行うとともに生葉品質の安定化を図っています。JAから分社化したアグリセンター都城茶事業部は、農地保有合理化事業を活用して借り受けた農地において、茶の植栽・成園化から生葉生産・荒茶加工までの茶業経営を行うことにより、農地の有効利用と遊休農地の拡大防止を図っています。(表5、図11)

表5 地域内で労働力を確保し茶園管理を行っている事例

活動名	茶園管理部門の法人化	茶工場による組織的茶園管理	JA関連会社による茶園管理
地区名	掛川市	浜松市春野町	宮崎県都城市
活動組織名	(有)G・F	(農)H・I園	(有)アグリセンター都城茶事業部
活動開始年度	平成16年1月設立	平成12年3月設立	平成13年7月設立
組織の状況 ^{10,11)}			
構成員数	社員4名、パート3名、臨時約30名	組合員16名、パート2名、アルバイト5～6名/日、生葉会員15名	正社員6名、年間雇用20名、季節雇用23名、シルハ ¹²⁾ 20～25名
茶園面積	18ha	16ha、買葉6ha	129ha
事業内容	生葉生産、作業受託	共同摘採、製茶・販売	農地集積、植栽・成園化、生葉生産・製茶・販売
所有機械等	乗用型茶園管理機5台、可搬型摘採機5台他	乗用型茶園管理機3台、可搬型摘採機、製茶機械120KL他	乗用型摘採機5台、乗用型防除機8台、製茶機械120KL他
設立及び活動の目的	生葉生産の共同化による作業合理化とコスト削減	共同化による経営合理化、生葉品質の統一	遊休農地の発生防止、茶生産事業
特徴	全茶園を法人が借地(利用権設定)	可搬型を中心とした共同摘採(摘採以外は個別管理)	不耕作農地の借り受け・成園化、正社員と登録社員による計画作業
活用事業等	強い農業づくり交付金事業	新山村振興等農林漁業特別対策事業	農地保有合理化事業、国庫補助事業(防霜ファン、茶工場)
成果及び今後の課題(問題点)	・作業能率の向上、コスト低減 ・課題：規模拡大と雇用増加のバランス維持	・生葉品質の安定、技術の高位平準化 ・課題：茶園評価法、共同摘採の体制改善	・農地集積と計画的な規模拡大 ・課題：幼木の成園化に伴う摘採集中及び管理作業の増大への対応



図 11 共同摘採とトラックへの積み込み作業(浜松市・HI園)

(2) 地域外から労働力を確保し茶園管理を行う事例

地域外から労働力を確保し茶園管理を行っている事例として、静岡市梅ヶ島大代地区では、一社一村しずおか運動を活用し、静岡大学と連携して学生を労働力として迎え入れ、地域の活性化につなげています。京都府和東町では茶園オーナー制により、都市住民との交流を図りながら茶園管理作業への参加を促しています。(表 6、図 12)

表 6 地域外から労働力を確保し茶園管理を行っている事例

活動名	学生による援農	茶園オーナー制
地区名	静岡市葵区梅ヶ島大代地区	京都府和東町
支援者(組織)名 (事務局)	静岡大学農学部 (静岡大学農学部現代 GP 運営委員会)	和東町ほっこりサークル (和東町商工会)
活動開始年度	平成 19 年度	平成 12 年度
作業支援状況		
人数	学生 31 名	サークル会員約 250 名 (作業は希望者のみ)
回数	年間 6 回 (うち 4 回は宿泊)	不定期、随時
対象面積	地区茶園面積 12ha	オーナー茶園 12a
作業内容	茶園の除草、茶樹更新、改植園の抜根、施肥 山葵の調整・植付け、稚芽のほだ木運搬	荒廃茶樹の伐採・抜根 (初年度のみ)、茶摘み、 茶園の除草、敷草
使用機械等	二人用茶刈機、運搬車	バックホー等
目的		
地区側	労働力の確保、都市住民との交流	耕作放棄茶園の再生、都市住民との交流
支援者側	農作業体験学習	地区住民との交流
活用事業等	現代的教育ニーズ取組支援プログラム (文部科学省)、静岡県一社一村しずおか運動	広域活性化事業 (中小企業庁, 当初 3 年間)
成果及び今後の課題(問題点)	・参加学生及び地区住民の評価は良好で、地区内の活性化につながっている。 ・課題: カリキュラム上の学生の誘導方法	・地区と都市の交流促進。 ・問題点: 交流イベントの減少に伴う会員の漸減、園主の耕作再開に伴う作業内容の縮小



図 12 静岡大学農学部学生による農作業支援と地元住民との交流

耕作放棄の大きな要因である茶園管理の労働力不足を地域内で補うために、茶工場を核とした共同作業や生産組織による作業受託が取り組みやすいと考えられます。茶工場内で摘採

を共同化することにより生葉品質の安定などの副次的効果も期待できます。地域の中核的担い手を中心として生産組織を構成することにより、機械の共有化や労働力の効率的な配置が図られ、作業受託も可能となります。

耕作放棄防止のための方策を実践するには、個々の生産者レベルでは困難が伴います。労働力の相互補完や作業受託組織の育成には、共同茶工場やJAが主導となり体制整備を行うことが期待されます。近年開発が進んでいるGISによる茶園情報システムは、筆ごとの条件や管理状況のデータを集約し視覚化することができることから、茶工場単位での導入も考えられます。一方、一旦耕作放棄された茶園を再生するには、伐採や再改植に要する経費も考慮しなければなりません。また、急傾斜地など極端に条件の悪い茶園は耕作を断念し、他の作目の栽培を選定したり、少しでも条件の良い茶園に労働力や設備を投資することが得策と思われれます。

静岡県では、一社一村しずおか運動（建設部農地計画室）*を進めており、平成19年度現在県内の農山村6地区において、企業等が農作業の支援を行っています。企業側は社員教育の一環として、農山村には労働力が確保され、更に住民と支援者の間に交流が生まれた結果、地域の活性化にもつながっています。

全国的には水田の耕作放棄を防止するため棚田オーナー制を実施している多くの事例が見られます。茶についても中山間地の条件不利地域では、茶園オーナー制を導入することも考えられます。茶園オーナー制度は、カバーできる面積も小さくオーナーの都合が優先されるため労働力の安定確保という点では問題があります。しかし、都市住民との交流促進により川根茶のファン拡大につなげる効果は大きいと思われれます。

*一社一村しずおか運動：都市部の企業と農山村地域に住む人の交流を促進し、農山村の自然環境保全や健全な農業振興を図ることを目的とする。里山の保全や耕作放棄地の復元などの作業を協働で行う。

おわりに

本研究を進める中で、多くの方から「景観で飯は食えない」という御意見をいただきました。反対に、「中山間地の活性化のためには景観の活用も重要だ」という御意見もありました。近年では農業農村の多面的機能（国土保全、水源涵養、良好な景観の形成、保健休養、教育など）への関心が高まり評価されるようになってきました。今後の産地存続のためには、貴重な地域資源である茶園景観の活用方法を含め、「茶」を売るだけでなく「茶のある地域」を売るという発想が必要ではないでしょうか。本研究の成果が、川根地域だけでなく、本県の中山間地茶業の活性化の起爆剤となることを期待します。

農林技術研究所茶業研究センター 主任研究員 鈴木利和

参考文献

- 1) 大石孝, 1996. 大井川の周辺と農村の移り変わり, p56-77.
- 2) 農林水産省, 2005. 2005年農林業センサス.
- 3) 中川根町史編さん委員会, 2006. 中川根町史 近現代通史編, p86-93, 812-817, 榛原郡川根本町.
- 4) 栗田英治・木村吉寿・松森堅治・長利洋, 2004. 棚田景観の評価構造と関係する物理的指標, 農村計画論文集第6集, p85-90.
- 5) 田之倉直子・横張真・山本勝利・加藤好武, 1999. 地元住民による水田景観の認知構造, ランドスケープ研究, 62(5), 727-732.
- 6) 岩崎邦彦, 2007. 川根茶マーケティング講演会配付資料.
- 7) 進士五十八・森清和・原昭夫・浦口醇二, 1999. 風景デザイン, p36-42, 学芸出版社, 京都市.
- 8) 相川香, 2007. お茶の新しい楽しみ方の提案, 月刊茶 2007年12月号, 6-11.
- 9) 山本徳司, 2008. 農業・農村体験の教育・保健休養効果についての心理的・生理的評価, 農業および園芸, 83(1), 86-94.
- 10) 静岡県農業水産部お茶室, 2006. 茶園管理組織経営体育成のすすめ, p14-26.
- 11) (有)アグリセンター都城, 2007. (有)アグリセンター都城事業概要資料.

平成20年10月発行

静岡県産業部振興局研究調整室

〒420-8601

静岡市葵区追手町9-6

TEL 054-221-2676

